

## 主な思い

### 1. 来館前

- ・ 受け入れているというスタンスを示してほしい

### 2. 施設

- ・ 受付の人に障がい者だと気づかれない
- ・ 受付で対応してもらえなかった（受付の人がひるむ、手話が使えない、筆談できない）  
（★ 展示室に入るまでがひと苦労）
- ・ 筆談は面倒
- ・ 必要情報（障害者手帳の提示など）をサイン化してほしい
- ・ 緊急時の情報が伝わらない
- ・ パンフレットを持つと手がいっぱい得手話ができない

### 3. 展示室内

- ★ 音を視覚化してほしい（音のある作品は表示してほしい）
- ・ スタッフの案内が声なので伝わらない
- ・ 映像作品に字幕と手話がほしい
- ・ 手話による解説があったらな
- ・ 手話による作品解説のビデオがほしい
- ・ あいさつ文を読むのが大変  
（文字量が多い日本が苦手な人もいる）
- ・ カタカナ、外来語がわかりづらい
- ・ 漢字にルビがほしい
- ・ 日本語が苦手な人もいる
- ・ すべてのろう者が文字情報を必要としているわけではない  
（★ もっと説明が読みたい、文字を読むのが苦手）
- ・ 暗いと手話が見えにくい
- ・ 目から情報を得ているので暗いと不便

聴覚の障がいは外見からではわかりにくく、美術鑑賞にも不便がないと思われがち。しかし、実際にはさまざまな不便や困難があり、中でも言語にまつわる課題が多いことがわかりました。コミュニケーションの手段には、手話、口話、筆談とあり、手話にも種類があります。また、手話を第一言語としている人の中には、日本語が苦手な人もいます。人によって漢字にルビをつけてほしい、長い文章を読むのが苦手、美術用語の手話が少ないなど、ニーズもさまざまです。ギャラリートークに手話通訳をつける際には、「手話と作品を同時に見られないため、それぞれの時間を設けることが重要」という指摘もありました。